

ネパールで感じた「共に生きる」ことの意味

桃山学院大学 2年生

佐々木 千華

共に生きる社会を作るために 私達ができること。それは、相手のこと理解することだ。相手を理解すれば、共に生きていけると思う。

世界には、たくさん国があり、文化があり、言語だって違う。もちろん人それぞれ考え方も感じ方も違うわけだ。時には考え方や意見が合わなくてぶつかることもあるだろう。身近な存在で言えば家族、大きい存在で言えば国。どのようにすれば共に生きられるのだろうか？

それはお互いを知ることだと思う。そして、理解することだ。私は、高校1年の時と、今年3月ネパールへ行ってきた。電気も水道もガスも窓も無いようなところで4日間ホームステイをした。そこで私が感じたことは、文化も大きく違うし言葉も通じないが、特に不便ではなかったことだ。むしろ意思疎通ができ、お互いに良い関係を築くことができ、別れの時は双方ともに号泣して抱き合って「さよなら」を言った。日本より不便な生活なはずだが、最高にいい思い出だ。私達がコミュニケーションを可能にしてくれる言語は「英語」、もしくは「指差しネパール語帳」という本一冊だけだ。英語はお互い得意ではないから100%言いたいことが言えないし、ネパール語帳も言いたいことが乗っていないと意思疎通には少し不便だった。

なぜ私達は意思疎通が出来、よい関係が築けたのか？『意思疎通には言語は60%ぐらいの役割しかなく、40%はジェスチャーで言いたいことは伝わる』といわれているのを聞いたことがある。私はその意見は一理あると思うが、意思疎通に一番大切で重要なのは“相手が何を伝えたいのか”を知るために、しっかりと『向かい合うこと』だと思う。それが言語の通じなかった私達を繋ぐことができたツールだと思う。ネパールの人たちは私達の下手な英語、ネパール語、ジェスチャーすべてに耳を傾け、考え理解してくれた。それは日本人の私達も同じで、ネパールの人達が私達に何を伝えたいのかしっかり聞いて、見て、考え思い向き合った。お互い向き合うことで言語、文化が違っていても、一生忘れない私の人生の一部になる関係が築けたと思う。

また、お互いを知るにはその文化の『生活に入ること』だと思う。ネパールに行く前までは手でご飯を食べることや、トイレも紙をつかわないなど、日本と大きく違うことに不安や疑問を抱いていた。しかし、ネパールで生活してみて思ったことは、実際に手でご飯食べることは思っていた以上に変ではなく、むしろ手で食べることは難しく日本人達は下手で口に運ぶ前にボロボロと落としてしまう。ネパールの人たちは綺麗に指先を使い、食べ物を落とさずに食べる。私は純粋にそれを受け入れ、すごいとまで思った。実際にネパールの人たちと生活しないと分からないことだった。

お互い向きあうことは簡単なことだと思うが、案外日本人達は日本人同士で出来ていないたりしている。意見がっていたり、自分と違うだけであの人はおかしいなどと決めつけ向き合うこともせずに排除しがちである。日本でのそのような体験がなければ、私はネパールでネパールの人達が示してくれた「真剣に向かい合っている」姿に感動しなかっただろう。

「共に生きる」ために、私ができることに関して、世界に目を向ける前に、一度自分の周りを見ることだ。何も知らないのに、「あの人は合わない」、「あの人は嫌いだ」と決め付けて向き合わずに排除していることがないか考えてほしい。一度向かい合っても、やっぱりこの人とは合わないと思うならそれでもいい。全員が理解しあうなんて難しい話だ。でも、一度真剣に『向き合う』ことが大切だと私は考える。そして相手の『生活に入る』（すなわち、相手の立場になって見てみる）。そういう態度や思考方法が広がれば、自分の周囲の人たちとはもちろん、文化の違う外国の人たちとも、『共に生きる』関係を築けるようになれると思う。